

稚内北星学園大学 2015 年度卒業式・式辞

本日、稚内北星学園大学を卒業される 24 名のみなさん、誠におめでとうございます。卒業生のご家族・関係者の皆様にも、お喜びを申し上げます。ご来賓として臨席を賜りました稚内市長をはじめとした地域の方々、そして教職員一同とともに、皆さんの卒業を心からお祝い申し上げます。

1987 年、昭和 62 年に短期大学として本学園が誕生して以来、間もなく 30 年が経とうとしています。卒業生は皆さんを含め 2600 名となりました。「稚内・宗谷の地に高等教育機関を」という地域の皆さんの熱い思いによって設立に至った本学園は、「地域に貢献する人材の育成」を建学の精神として掲げ、実際、この地域の自治体・学校・企業などに数多くの卒業生を輩出しています。初期の卒業生の中には、稚内市役所の課長職や、小中学校の教頭として組織の中核を担う方々も出てきています。また特に IT 分野では、札幌や東京の企業の第一線で活躍されている方も多くおられます。今日卒業される皆さんも、そうした先輩諸氏の後に続き、それぞれの場所で奮闘されるに違いありません。

俗に「社会に出る」という言い方をしますが、この後、みなさんは社会の中で自立していくことで社会の一員としての役割をより重く、本格的に担っていくことになります。

では、「自立」とはなんでしょうか。

鷺田清一という哲学者が、次のように語っています。

「自立」は、他人の力を借りずに、ひとりで生きられるということではない。…「自立とは、他人から独立（インディペンデンス）していることではなく、他人との相互依存（インターディペンデンス）のネットワークをうまく使いこなせるということこそ意味する。

つまり、必要な時には「助けてくれ」と声を上げれば、それにきちんと応えてくれる支え合いのネットワークのなかにあるということ、あるいは、そういうネットワークを構築すること、それが「自立」なのだと鷺田さんは説いています。それはまた必要な時には自分が助ける側にもなる、そのように支え合って生きるつながりに身を置くことこそが「自立」なのだと知っているわけです。

ネットワーク理論に、「弱い紐帯の強さ」という定式があります。「弱い紐帯の強さ」。少し言い換えると、「弱い結びつきの中にいる方が強い」。その理論は数学的に証明できるものようで、私は読んでも歯が立ちませんでした。結論そのものは、常識的な感覚で納得できるものです。

「強い紐帯」とは、強い絆で結ばれて、他を寄せ付けないいわばベッタリな関係のことです。いざトラブルや環境の変化があったときには柔軟に対応できず、もろい。新しい知恵を取り入れることができないからです。これは例えば、孤立した家族が子育てのトラブルがあったときに、近所に助けを求めるともできず、行政に相談する術も知らず、結局虐待に至ってしまうようなパターンが当てはまるかと思います。

逆に「弱い紐帯」とは、ちょっとした知り合いや、“知人の知人”のように、ふだん密接ではないけれども、必要な時に助けを求めると応えてもらえるような関係のことです。「法律のことなら彼が詳しい」「彼女ならこの種のトラブルに対応できる人を知っている」、というように、つながりの向こう側とも支え合うようなネットワークの中に身を置くと、変化に強い。それが、「弱い紐帯の強さ」です。

実際には、強い紐帯もなければならぬでしょうが、それだけだと孤立するゆえ、自分にとっての「弱い紐帯」の世界、ネットワークを広げるのも大事だ、くらいの教訓にしておけばいいかもしれません。そして先ほどの文脈で言うところの「自立」とは、ごく身近でも、あるいは多少遠くとの間ででも、助け合えるような関係の中に身を置くことである、ということになりそうです。「弱い紐帯の強さ」を活かせるように、そこでの支え合いシステムに参加できるように、閉じこもらないことが必要だ、ということです。

インターネットそのものは「弱い紐帯の強さ」を体現したものであり、私たちはそれを駆使しているわけですが、そこで形成される私たちのつながりは、果たして“世界を広げるもの”になっているのでしょうか。社会学者の土井隆義は、今日の若者の人間関係について、次のように指摘しています。

彼らは、良好な人間関係を維持し続けるため、ネットも駆使しながら絶え間ない努力を続けている。[...]人間関係の流動性が高まったにもかかわらず、関係を広げていくことによってではなく、むしろ逆に閉じることによって、少しでも安定した関係を確保しようと躍起になっている。自分と価値観の似通った者だけで仲間を形成し、その他の人々とはなるべく関わりを持たずとしない。

SNS でのやりとりの多くが、ここで危惧されているような閉じた関係、つまり「強い紐

帯」にとどまってしまっているのではないでしょうか。

しかしながら、みなさんは、この大学で、「情報メディア学部」で学びました。PC やインターネットを効率的に使うということだけではなく、それらを使ってどのように社会に役立つシステムを構築するのか、あるいは人々に向かってどうやって効果的に表現するのか、メディアは社会にどう影響するのか、総合的に学びました。すなわち、PCやインターネットの個人的な閉じた利用ではなく、それらの社会との開かれた関係を意識せざるを得ないカリキュラムで、学びました。

さらに、本学のスローガンのひとつである〈街を教室に〉というのは、ただ学校の敷地外に出るということではもちろんなく、学外の「人」と新しいつながりをつくる、あるいは街のネットワークに仲間入りする体験を持つという意味を持っていました。その意味で、「自立」の練習でもあったのです。

COC、地（知）の拠点整備事業に採択されて以来、そういった機会も増え、卒業生のみなさんの中にも直接かかわった方もいらっしゃるかと思います。新しい関係に飛び込む、新しい関係をつくるというのは、面倒で、怖くて、できれば避けたいものだったかも知れませんが、しかし、協力し合う・支え合うネットワークに加わるというのは、大きな喜びでもあったはずですよ。

卒業生のみなさん、どうぞ、自信をもってください。

みなさんは、本学の教職員だけではなく、家族やこの地域の方々にも育てられ、いまここに卒業を迎えられることとなりました。これまでみなさんを支えてきた「つながり」に改めて思いを致すとともに、今後はさらに飛躍して、職場で、社会で、新しい「つながり」を作り、「自立」した生活を送ってください。

助けが必要なときは、求めてください。そして、求められたら助けてあげてください。これからの社会、生きていく上での困難やリスクは高まりこそすれ低まることはありそうもないと私は感じています。どうか、「強い紐帯」だけでなく「弱い紐帯」にも意を払いつつ、支え合って、生きていってください。

改めまして、皆さんのこれからの人生が実り多い、幸福なものでありますよう心から祈念して、私の式辞といたします。本日は、誠におめでとうございます。

2016年3月15日 稚内北星学園大学 学長・斉藤吉広